

氏 名	E・T
専 修	農業・資源経済学専攻
学 年	修士2年生
渡航先	台湾
期 間	2023/6/26～2023/7/25
内 容	1カ月にわたったBACT（国立台湾大学サマープログラムBACT:Biodiversity, Agriculture, and Culture of Taiwan Summer Program）を通じて、農学分野での日台の様々な共通点、日台それぞれの特徴について体感する機会が多くあった。 特に、農業においては、農業従事者の所得向上は日台双方にとって長年の課題である一方で、日台それぞれがユニークな方法で所得向上を実現しようとしていると感じた。 第二次世界大戦後、日台ではともに農地改革が行われ、農地の所有権が小作人に引き渡され、働いた分だけ自身の収入に結びつくという形で、農業従事者の水稻の生産意欲が向上した。その一方で、やがて人口ボーナスが失われる中で、生産性の劣る零細錯圃の状態が現代まで尾を引いていることも共通点である。 台湾の西側、台湾海峡に向けて広がる稲作地帯では、水田と住宅や商業施設、工場がモザイク状に入り乱れている光景を何度も目にした。特に、新竹県など台湾北西部では、半導体関連産業の大規模な工場が水田に囲まれて建設されている光景が広がっていた。農地転用には農業委員会を通じた許可が必要で、農地転用が実質的に制限されている日本とは対照的に、台湾では産業利用や住宅建設の際に比較的融通の利く、しかし農地の面的集積・集約が必ずしも容易ではない制度設計になっているように感じた。 その一方で、水田地帯であっても、果樹、花卉など高収益作物に意欲的に取り組んでいるような印象を抱いた。これらの作物が作付けされていることにとどまらず、公的機関による知財の保護など、生産者を支える行政などのあり方を知る機会もあった。稲作においても、生態系保護に資する栽培方法をブランドとして確立させようとする試みや、スーパーマーケットの店頭に並ぶ米袋にQRコードが付いており、包装された日付や検査機関などを消費者が確認できるシステムが導入されていることなど、米の正当な価値を消費者に認知してもらうための様々な工夫がなされていると感じた。 日本の稲作では、従事者の所得向上に向けて、単作による資本の利用効率の向上、機械化による省力化、区画拡大などの土地改良が試みられている。一方で、台湾の稲作では、優良農地を面的に保全できているとはいえ、ハード面での生産性向上は容易ではないと感じたが、台湾にユニークな形での複合化や付加価値の創出によって、農業従事者の所得向上が図られているように感じた。